

日経によると、今年の1～3月期の産業天気図予測は、「主要30業種のうち16業種が「雨」または「小雨」となった。09年10～12月期の当初予測（09年9月時点）との比較では、自動車や鉄鋼、電子部品が「小雨」から「曇り」に改善するなど製造業に明るさが出ている一方、外食とアミューズメントの2業種が悪化、回復傾向に足踏み感が出てきた。」と述べています。

しかし、国民にとっては「回復傾向に足踏み感」どころか、「回復基調にあるのか」というのが実感です。

確かに、総務省が発表した労働力調査によると、12月の完全失業率（季節調整値）は5.1%で、前月比0.1ポイント改善したとのことですが、完全失業者数はリーマン・ショックに襲われた前の年12月より47万人多い317万人、就業者数も6223万人で、108万人減っています。

これでは、国民にとって「回復傾向に足踏み感」よりも、まだまだ、今年度3月期末には「景気は2番底があるのでは」というのが実感です。

自動車のエコカー減税、家電のエコポイントなどで国内販売が上向いているでしょうが、消費者が真っ先にできる家計防衛策である家庭用ゲーム機の買え控えや外食を控えるなどの節約意識の高まりで、更に消費の不振が続くと思われます。

寺田寅彦の「ある幻想曲の序」を借りれば、

「京都に恋人たちのランドマークがある。老舗デパート。恋人たちが佇む。

その老舗デパートが閉鎖した跡のガランとした布に覆われた商品ケースが五、六台、重くなって捨て去られたまま朽ちかかっている。商品ケースの埃に太陽の光があたり、幻想的な光景を醸し出している。

遠くで買い物客の音がする。やがて開店の時刻、買い物客の足音が聞えて、それがだんだんに近付いて来る。扉が開かれ待ち焦がれていた買い物客が飛び込むように店内の騒音の中へ消えて行く。

女性客の群が現われる。赤い服、白い袴、黒い靴の女性の姿が商品の間を縫うて嵐のようには通り過ぎる。女性が目指す商品の売り場へ飛んで行って商品の間を歩き回っていたが、目的の商品が見つかり、女性客が弾かれたように駆け出して商品の品定めを行なう。

目指す商品が売り切れると、ひっそりする。売り場の騒音が何事もなかったように静まる。

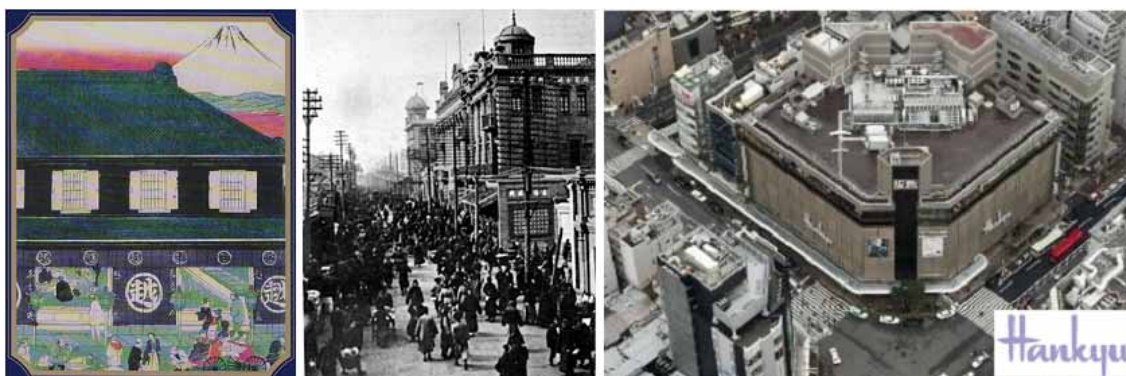
いずこともなく家族連れの群がやって来る。眩しいような真昼の光の下に相角逐し、ニソフの様な子供たちが駆け回り狂うておもちゃ売り場をめぐる。売り場でおもちゃが取り合いになり、時々取られた子供の泣き声立つ。やがて狂い疲れて父親の手に抱かれ、眠ってしまう。売り場におもちゃを買ってと駄々をこねる子供の泣き声も聞える。

日が陰って閉鎖したデパートから薄糸のような霧が立ち始める。

再び遠くから車の警笛の音、カップルの立ち去る足音が聞えて来る。ニンフの様な子供たちの群はもうどこへ行ったか影も見えない。」

もう当時の隆盛は戻ってこないのでしょうか。

日銀総裁は金融政策決定会合後の記者会見で、「景気の回復基調が途切れることはない」と述べていますが、しかし、経済は生き物、新興国経済が「予想を上回る力強い回復を続けている」ためという他国頼り、もっと国民が納得する景気対策がなければ、また、極めて緩和的な金融環境を維持していく方針だけでは、欧米の景気回復が遅れているように、日本も同様、景気回復が遅れる懸念が無いとは思えません。



### 寺田寅彦「ある幻想曲の序」

<二>

森の中に沼がある。大きな白樺が五、六本折れ重なって倒れたまま朽ちかかっている。朽木の香があたりに立ち籠めている。

遠くで角笛(つのぶえ)の音がする。やがて犬の吠声、駒の蹄(ひづめ)の音が聞えて、それがだんだんに近付いて来る。汀(みぎわ)の草の中から鳥が飛び立って樹立(こどち)の闇へ消えて行く。

獵の群が現われる。赤い服、白い袴、黒い長靴の騎手の姿が樹の間を縫うて嵐のように通り過ぎる。群を離れた犬が一疋汀へ飛んで来て草の間を嗅いでいたが、笛の音が響くと弾かれたように駆け出して群の後を追う。

獵の群が通り過ぎると、ひっそりする。沼の面が鏡のように静まる。

いずこともなくニンフとパンの群が出て来る。眩しいような真昼の光の下に相(あい)角逐(かくちく)し、駈けり狂うて汀をめぐる。汀の草が踏みしだかれて時々水のしぶきが立つ。やがて狂い疲れて樹蔭や草原に眠ってしまう。草原に花をたずねて迷う蜂の唸りが聞える。

日が陰って沼の面から薄糸のような霧(もや)が立ち始める。

再び遠くから角笛の音、犬の遠吠えが聞えて来る。ニンフの群はもうどこへ行ったか影も見えない。(大正十二年八月『明星』)



< 寺田寅彦 (1878-1935) >

随筆家、地球物理学者。東京市麹町区（現在の千代田区）生まれ。東京帝国大学卒。

航空研究所、理化学研究所、地震研究所、東京帝国大学（教授）等に所属、大正12年（1923）45才の時、関東大震災に遭遇し、火災旋風等の調査に従事。

漱石の門下生でもあり、吉村冬彦の筆名で数多くの随筆を書いている。

「天災は忘れた頃に来る」という言葉を言い出したのは寺田寅彦であるといわれている。

作品に『漫画と科学』『科学と文学』『西鶴と科学』『珈琲哲学序説』『神話と地球物理学』などがある。



#### 日経：「1～3月：回復に足踏み感」(1/4)

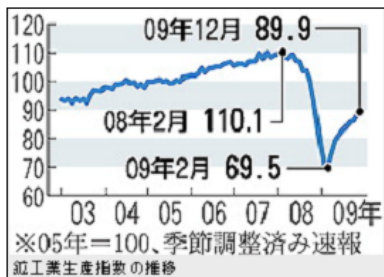
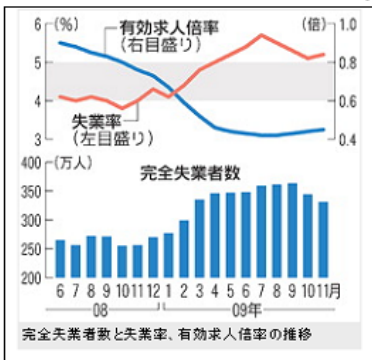
日本経済新聞社が3日まとめた2010年1～3月期の産業天気図予測は、主要30業種のうち16業種が「雨」または「小雨」となった。09年10～12月期の当初予測（09年9月時点）との比較では、自動車や鉄鋼、電子部品が「小雨」から「曇り」に改善するなど製造業に明るさが出ている一方、外食とアミューズメントの2業種が悪化。回復傾向に足踏み感が出てきた。

自動車はエコカー減税などで国内販売が上向していることから2期連続で上方修正。鉄鋼・非鉄は輸出が回復しているほか、国内でも自動車や家電などの需要が戻りつつある。電子部品・半導体はパソコンの販売好調を受けてメモリーやハードディスクの需要が伸びている。この3業種については09年10～12月期の判断も当初予測の「小雨」から「曇り」に修正した。

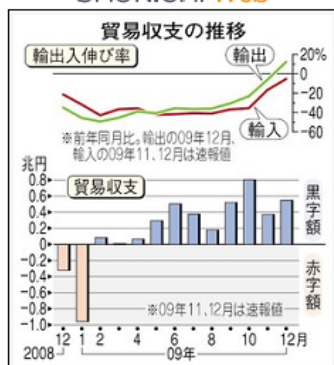
一方、09年10～12月期まで「薄日」だったアミューズメントは家庭用ゲーム機などが低

迷し、10年1～3月期は「曇り」に下方修正。外食も消費者の節約意識の高まりで不振が続いており、09年10～12月期を当初予測の「曇り」から「小雨」に修正。10年1～3月期も「小雨」に据え置いた。

毎日JP



CHUNICHI Web



### 春秋：「技術への強烈な関心」(1/28)

ジェームズ・キャメロン監督は「文転組」だった。大学で物理学を専攻したが、途中で英文学に転向した。科学技術は大好きだが、数学の勉強が嫌いだったようだ。映画界を代表する監督の頭の中は半分が理科系、半分は文科系である。

技術への強烈な関心は作品に表れている。最新作「アバター」の映像は圧倒的だ。実際に演技する俳優の体の動きや顔の表情を特殊なカメラでとらえ、そのデータを元に異星人の姿をした俳優の化身をコンピューターが描き出す。公開から6週間で興行収入の史上記録を更新し、世界で1700億円を稼ぎ出した。

6世紀ほど前、世阿弥は舞台での身体表現と人の心の動きについて説いた。秘すれば花。秘せねば花なるべからず。「花伝書」の花が何を指すかの解釈はさまざまだが、演ずる者の技が高くなければ、舞台に花は生まれえない。逆に技を前面に出しすぎれば、花を失うこともある。感動は微妙な均衡の上に成り立つ。

キャメロン作品の成功の秘密は、監督自身が技術の使い方を心得ていることだろう。技に精通しているが、技におぼれることはない。前作の「タイタニック」から12年間沈黙していたのは、表現したい映像を実現する技術の登場を待っていたからだそうだ。映画館の帰り道に、技術大国ニッポンの経済不振を思う。

<ジェームズ・キャメロン(1954-)>

映画監督、脚本家、映画プロデューサー。カナダ・オンタリオ州カプスカシング生まれ。米カリフォルニア州立大学フラトン校中退。

1978年3友人と共に5ミリの短編SF『Xenogenesis』を制作、SFアクション映画『ターミネーター』が世界中の映画ファンにその存在を知られる。

1997年『タイタニック』でアカデミー監督賞などアカデミー賞11部門を受賞、世界映画史に残る大ヒットを記録。

監督作品として、『殺人魚フライングキラー』『エイリアン2』『アビス』『トゥルーライズ』など多数。



### 天声人語：「CM天気図」(1/28)

お正月の福袋売り場の熱気は記憶に新しい。どのデパートも押し合いへし合いの盛況になった。だがコラムニスト天野祐吉さんの筆は辛い。「福袋が売れるんじゃない、福袋しか売れないのだ」という知人の言を、小紙連載の「CM天気図」に書いていた。

「福袋を買うのはモノを買うのではない。福袋を買うというコトを買うのだ」という天野さんの目も鋭い。福袋の季節にだけ、デパートはかつての祝祭的な空気を取り戻すようだ。

デフレの下、百貨店業界を覆う雪景色はきびしい。怒濤(どとう)のような安値の商品に押され、去年の売り上げは24年ぶりの低さに沈んだ。閉店の動きが各地で相次ぐ。東京の銀座でも、名所の有楽町マリオンから西武有楽町店が消えることになった。

フランク永井の低音で「有楽町で逢(あ)いましょう」が流行(はや)ったのは53年前になる。開店したそごう東京店のイメージソングだった。時代は変わり、その建物にいまは家電量販店が入る。歌の碑が一昨年、マリオンの前に設けられた。

買い物は、ただカネとモノの交換ではあるまい。期待と満足。包みを抱えて帰る喜び。作る人売る人との縁……。思えば豊かな行為である。なのに昨今、そのふくらみが細ってしまった寂しさがある。

デパートに百円ショップ出店せりやがてデパートもここで売られむ 栗木京子。作った人の生活が立ちゆくのか、心配になるほどの安値でモノが売られている。買う方とて、その安さの先に希望は見つけにくい。社会も暮らしもちぢこまっていく体感が冬の列島を締めつける。

#### <天野祐吉(1933-)>

コラムニスト、雑誌「広告批評」主宰者、マドラ出版社主。東京市足立区(現東京都足立区)出身。明治学院大学中退。

創元社、博報堂を経て独立、雑誌「広告批評」を創刊。広告に対する批評で知られる。

2002~2007年、中学・高校時代を過ごした愛媛県松山市にある松山市立子規記念博物館館長。

作品に『広告論講義』『私説広告五千年史』『天野祐吉のことばの原っぱ』『たのしいネーミング百科』『さようなら経済大国』など。



#### <栗木京子(1954-)>

歌人。本名、中原京子。愛知県名古屋市出身。京都大学理学部生物物理学科卒。

大学在学中に「コスモス」に入会し、京大短歌会顧問でもあった高安国世の指導を受ける。1981年に「塔」入会、現選者。「読売新聞歌壇」選者。



初期は代表歌「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生」に象徴されるような、清新な青春歌を持ち味とした。結婚後は教養ある主婦が身边をつぶさに歌う日常詠へと作風が変化している。

歌集に『水惑星』『中庭(パティオ)』『綺羅』『万葉の月』『夏のうしろ』『けむり水晶』など。

### 編集手帳：「新しいことを始める人に受難」(1/27)

ルノワールと聞いて、薔薇（ばら）色の頬（ほお）をした可憐（かれん）な少女を思い浮かべる人も多かろう。生命力あふれる肖像画によって「幸福の画家」と呼ばれるその人も、当初の評判は散々で、光の点々を描く技法は“腐乱死体”との悪評を浴びたという。

モデルたちでさえ、ルノワールに描かれるのを嫌がったので、彼は自分の家の家政婦をモデルにしなければならなかった。美術評論家の高階秀爾（たかしなしゅうじ）さんが著書「近代美術の巨匠たち」（岩波現代文庫）に書いている。

新しいことを始める人に受難はつきもの、印象派の巨匠も例外ではなかったらしい。

『団扇（うちわ）を持つ若い女』『アンリオ夫人』など国内外の主要コレクション77点を集め、画業と技法を振り返る「ルノワール 伝統と革新」展が東京・六本木の国立新美術館で開催されている。うっとりしい世相をしばし離れ、ルノワールならではの、一枚一枚の絵が放つ暖かな春の空気に触れるのもよろしかろう。

愛らしい少女や美しいご婦人に別れを告げて外に出ると、風は身を切るように冷たい。

ルノワールの女に毛糸編ませたし。俳人、阿波野青畝（あわのせいほ）の句に、ひとりうなずく。

#### <オーギュスト・ルノワール (1841-1919) >

フランスの印象派の画家。フランス中南部リモージュ生まれ。

代表作の多くは人物画で、初期にはアングル、ドラクロワなどの影響を受け、モネらの印象主義のグループに加わるが、後年は古典絵画の研究、晩年は豊満な裸婦像などの人物画に独自の境地を拓いた。



1870年、普仏戦争が勃発すると召集され、ボルドーの第10騎兵隊に配属されるが、赤痢にかかり除隊。除隊後は、パリ郊外・アルジャントゥイユで制作、1873年、モネ、ピサロ、シスレーらの後に「印象派」と呼ばれるグループの画家たちと「芸術家、画家、彫刻家、版画家その他による匿名協会」を結成、多くの作品を残していく。

作品に、『棧敷』『ぶらんこ』『陽光を浴びる裸婦』『ムーラン・ド・ラ・ギャレット』『シャルパンティエ夫人と子どもたち』『舟遊びの人々の昼食』『田舎のダンス』など。

#### <高階秀爾 (1932-) >

美術史学者・美術評論家。東京大学文学部名誉教授。大原美術館館長。東京大学大学院在学中、1954～1959年にフランス政府招聘留学生として渡仏、パリ大学付属美術研究所およびルーブル学院で西洋近代美術史を専攻。



東京大学美術史研究室教授として数多くの著作を著し、啓蒙的役割を果たしたルネッサンス以後の西洋美術を専門としながら、日本近代美術にも造詣が深くその方面の著作もある。

作品に、『世紀末芸術』『ピカソ 剽窃の論理』『現代絵画』『20世紀美術』『芸術・狂気・人間 その実態と本質を探る』『フィレンツェ 初期ルネッサンス美術の運命』など。

< 阿波野青畝 (1899-1992) >

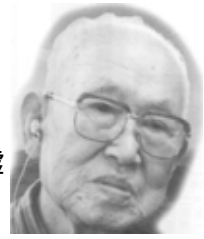
俳人。本名は阿波野敏雄。奈良県高市郡高取町生まれ。畝傍中卒業。

1917年(大正6年)句会で郡山に来遊中の高浜虚子と出会い、師事。虚子は難聴であっても大成している俳人・村上鬼城を紹介し激励。

1922年野村泊月の『山茶花』の創刊に参加。1929年『ホトトギス』同人、昭和初期の『ホトトギス』の四S(山口誓子、高野素十、水原秋桜子)の一人。

1973年『甲子園』他で第7回蛇笏賞受賞。

作品集に『萬両』『国原』『定本青畝句集』『春の鶯』『紅葉の賀』『甲子園』『旅塵を払ふ』など。



### 余録：「百貨店の苦境」(1/28)

「ひとたび店内に足を運ばるるならば、まさに武陵桃源に遊ぶの感なかるべからず」 -  
- 春ならばうっとり露をふくむ桃花の下に、若草をしとしと踏む清き聖なる風情、秋ならば物のあわれ真紅の紅葉に酔いたるがごとく、足の運びもゆるやかに.....。

どこの桃源郷かと思えばデパートの話である。日本初の近代的百貨店を生み出した三越の日比翁助は、デパートの売り場の空気はこうでなければならぬと提唱したのだ。お客に美しくなごやかな別世界に遊んでもらうのがその理想だった。

日比が取り組んだのは明治に入って大名や旗本の得意先を失い、経営難に直面していた呉服店の経営改革だった。彼はまず「デパートメントストア宣言」で百貨店への生まれ変わりを新聞などで宣言し、およそ10年をかけ今日に連なる日本の百貨店のスタイルを作り上げたという。

苦境が伝えられる今日の百貨店業界だが、今度は東京・有楽町の西武が年内に閉鎖されるという。まさに日本を代表する商業地に立地する大手百貨店の撤退である。景気低迷による消費者の百貨店離れと低価格店志向に歯止めがかからない。

昨年の全国の百貨店売上高はピーク時の7割という。看板商品の婦人服や宝飾品の売り上げは30カ月以上も前年割れが続く有り様だ。昨年は全国で9店が閉店したが、西武・有楽町店の閉鎖で今年はそれ以上となることがほぼ確実となった。

だが思えば、時代に取り残された呉服店の経営改革が生んだ日本の百貨店ではないか。経営者に求められるのは時代を先取りした「新デパートメントストア宣言」だ。消費者だっただけでもない桃源郷ができれば行ってみたい。

< 日比翁助 (1860-1931) >

日本初の百貨店三越をつくった人物。幕末の久留米藩士の次男として生まれる。慶應義塾卒業。

外国資本の商社などを経て、1896年三井銀行に入社、1898年三井呉服店に入り、改革を進めた。

1904年株式会社三越呉服店が設立され、益田孝が代表発起人、日比が専務取締役に就任。このときに「デパートメントストア宣言」を行った。

1906年、欧米を視察し、ロンドンのハロッズ百貨店をモデルにルネッサンス様式の新店舗を建設。

「今日は帝劇、明日は三越」というキャッチフレーズもこの頃に作られた。

